(仮称)西公園屋内遊び場基本計画シンポジウム

みんなで創るあそびのカタチ

開催報告

2025 年 7 月 19 日 （土） 午前10時から、 青葉山公園・仙臺緑彩館 交流体験ホールにて、（仮称）西公園屋内遊び場基本計画シンポジウム「みんなで創るあそびのカタチ」を開催しました。

○仙台市が描く 「（仮称） 西公園屋内遊び場」 のビジョン - 仙台市長 郡 和子

仙台市では 「こどもにとって遊びは成長の原点」という考えのもと、これまで公園や児童館の整備、そしてプレーパーク活動の普及に力を注いできました。しかし、近年、夏の猛暑や集中豪雨といった予測不能な気候変動が顕著になり、こどもたちが屋外で安全に遊ぶ機会が失われつつあり、このような背景から、保護者の皆さまから寄せられる「どんな天候であってもこどもたちが安心してのびのびと遊べる場を提供してほしい」という切実な願いに応えるため、今回の屋内遊び場の整備を決定しました。 この屋内遊び場は、仙台の自然を象徴する広瀬川を間近に感じ、さらに地下鉄東西線の電車が走る様子を眺めることができるという、こどもたちにとって「ワクワクがたくさんある」西公園の立地を最大限に活かして整備します。また、現在、西公園で進められているアーバンスポーツ広場や大型遊具の整備とも連携し、地域全体が一体となった新しい賑わいと交流の拠点となることを目指します。

○「（仮称） 西公園屋内遊び場基本計画の骨子」 について - 仙台市子育て応援都市推進課長 大宮 伸吾

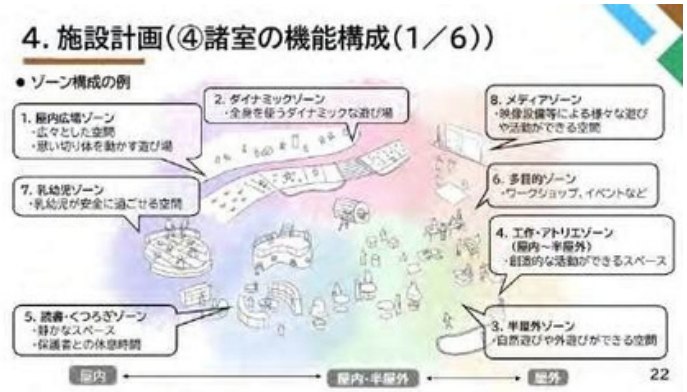
施設の基本理念は「広がる遊びと、かがやくこどもの未来～笑顔あふれる杜の都の遊び場～」です。この理念のもと、 多様で自由な遊びがこどもの健やかな成長を支え、未来を拓く施設となることを目指していくこと、特に、屋内と屋外の連続性を持たせた遊びや、周辺施設との連携による多様な体験・学びの創出に力を入れていきます。

施設のコンセプトは、・ 遊びが広がる施設 ／・ 体験や学びの機能を重視した施設 ／・ 親や同伴者も満足できる施設 ／・ 仙台らしさを感じられる施設 ／・ 多様な人が訪れることができる施設です。

主な利用者としては、 乳幼児から小学生までを想定しています。また、保護者や公園利用者も快適に過ごせる機能も検討しており、施設全体として幅広い層が楽しめる空間を目指しています。主なアクセス環境については、地下鉄東西線大町西公園駅からの歩行者、車、そして団体利用によるバスでの来館の 3 つを想定しており、地下鉄駅出入口がある西公園上段の芝生広場から屋内遊び場へ接続する連絡橋の設置や、計画地北側への立体駐車場の整備、さらに安全なバスの乗降環境の確保などについて検討していきます。

施設配置案は、広瀬川に向かって半屋外空間や屋外広場を設けることで、屋内と屋外がシームレスにつながることが特徴です。これにより、こどもたちは天候を気にせず、自然を感じながら遊ぶことができます。現時点の施設の想定規模は約 3,200 平方メートルで、1階は半屋外空間、工作アトリエゾーンのほか、多目的ゾーンを設けるなど、公園全体に開かれた機能も整備します。2階には、こどもたちが遊びに没頭できるような機能を集約し、屋上には、公園全体を一望できる広場と上段エリアからの連絡橋を設けることで、動線の確保と多様な景観を楽しめることを目指します。

施設内のゾーン構成は、 こどもの多様な遊びのニーズに応えるべく、 以下の 8 つのゾーンをイメージしています。



・屋内広場ゾーン：広々とした空間で思い切り体を動かす遊びができる空間
・ダイナミックゾーン：魅力的な遊具を配置し、全身を使って遊ぶ空間
・半屋外ゾーン：天候に左右されず、砂場や水遊びなど、自然を生かした遊びができる空間
・工作アトリエゾーン：創造的な遊びができる、屋外でも活動可能な空間
・読書くつろぎゾーン：読書や静かな遊び、休憩など、落ち着いて過ごせる空間
・多目的ゾーン：保護者や地域住民が交流できる、イベントやワークショップにも活用できる空間
・乳幼児ゾーン：乳幼児が安全に安心して遊べるように配慮された専用エリア
・メディアゾーン：映像やデジタル機器を活用した多種多様な遊びや学びの空間

整備期間は、日々成長するこどものための施設であるという観点から、できるだけ早期の整備と供用開始を目指します。また、利用料金は、現時点では未定であるものの、保護者アンケートで寄せられた多様な意見を踏まえ、施設の持続可能な運営と子育て家庭が利用しやすい環境を整える観点の両立を図るべく、今後慎重に検討していきます。

○“みんなで創る？”遊び場　-　寺田 光成 氏（日本体育大学子どものからだ研究所助教）

昨今では、外遊びを週一日もしないというこどもも多く、遊びが「スクリーン化」しているという調査結果もあります。近年の猛暑が、こどもたちの外遊びの機会を著しく奪っています。アラブ首長国連邦の首都アブダビでは、世界レベルの屋内遊び場が複合的に整備されており、日本でも同様の取組が必要です。

今回のシンポジウムの「みんなで創る」というタイトルが上っ面で終わらないために、3つのメッセージをお伝えします。

1つ目は、屋内外のつながりの重視です。屋内遊び場は、建物の中だけでなく、街の風景の一部として遊びが見えるようにすることが重要です。また、「屋内遊び場」という名称ではどうしても内に閉じた印象となるため、多様な体験拠点として「遊びセンター」のような名称はどうでしょうか。デンマークには、公園内に設置され、プレーリーダーが常駐し、特別な道具がなくても自由に遊べる環境が整っている屋内遊び場があります。屋内と屋外を物理的・精神的につなぐ上では、「運営」が最も重要な点だと思います。

2つ目は、インクルーシブな遊び場の実現です。近年注目されるインクルーシブな遊び場は、世田谷区の砧公園から全国に広まりました。素晴らしい施設ができたとしても、 例えば障害を持つこどもの親が孤立を感じてしまう場合もあり、モノとしての環境だけでなく、それを支える「人間環境」が重要です。そのために、専門職やスタッフが常駐すること、そして計画段階から多様な人々の声を反映させていくことが必要です。

3つ目は、こどもの参画の推進です。こども基本法が求める「こどもの声を聞く」という取り組みを、単なるアンケート調査に留めるのではなく、こども自身が施設について考え、その意見が実際に計画に反映されるようなプロセスを創出することが大切です。こどもが意見を言いやすい場として「授業」求められているという調査もあり、学校との連携も重要と考えます。こどもの参画がこども自身、大人、そして行政のそれぞれに大きな意義をもたらします。こどもにとっても、貴重な体験になることは間違いありません。

私の出身地、栃木県にある日光東照宮には陽明門という門があり、その真ん中にはこどもが遊ぶ姿が刻まれています。街で遊ぶこどもの姿は平和の象徴と言われていました。この屋内遊び場の整備により、遊びあふれるまちが創られれば良いなと思います。

○遊び育つ子どもを共に育む　さくらんぼタントクルセンター 「けやきホール」 の挑戦　-　村山 恵子 氏（NPO法人クリエイトひがしね 事務局長）

さくらんぼタントクルセンターとあそびあランドには、日ごろ仙台市からも多くの方がお越しいただいております。仙台市に屋内遊び場ができるにあたり、私たちが大切にしてきた運営についてお伝えできることがあればと思います。

タントクルセンターは、 老朽化した公共施設の再編という市のプロジェクトの中で、冬場の雪による子育ての困難を解消するため、市民検討委員会が5年間をかけて構想し、開館しました。遊び場「けやきホール」のコンセプトは、樹齢 1500 年の大ケヤキをモチーフとした「世代を超えた人々が集まり、交流を深める拠点」です。施設の正式名称である「遊びセンター」には、「こどもの豊かな育ちを保障し、遊びの大切さを親に伝えるセンター」という意味が込められています。

現代のこどもたちから時間・空間・仲間の「三間（さんま）」が失われつつあるという課題に対し、けやきホールは時間制限や年齢制限を設けずに運営し、0 歳から中高生までの異年齢交流を促進することで「三間」を作り出しています。こどもたち同士のトラブルを学びの機会と捉え、こども自身による対話や解決を重視することで、自主性や共感力を育んでいます。また、けやきホールの運営の根幹には、東根市の「子ども子育て支援事業計画」 にも明記されている「遊育（こども自ら遊び育つ）」と「共育（親も子も共に育つ）」 という理念あります。常駐するプレーリーダーが、遊びのきっかけづくりやこどもたちの挑戦をサポートすることで、これらの理念を具現化しています。タントクルセンターのオープン時、東根市長が「多少の怪我はお持ち帰りください」と言ってくださりました。この言葉のおかげで、私たちは委縮することなくのびのびと活動ができており、行政のバックアップが大きな力になっています。東根市は、転入者が多く、孤独を感じる保護者が増えています。知縁のない場所で子育てリスクも高まるなか、保護者が気軽に集まって交流できる場を設けることで、「共育」を実践し、親も子も共に成長できる環境を提供しています。

けやきホールが開園して20年が経ち、利用していたこどもたちが、親になってわが子を連れて遊びに来てくれています。けやきホールが、こどもや保護者にとっての心のふるさとになることが私たちの願いです。

○“のびすく泉中央”から見た親子の居場所について　-　小川 ゆみ 氏（一般社団法人マザー・ウイング代表理事 のびすく泉中央副館長） 氏

お二人のお話を聞き、仙台の良いところも伝えなければということで、仙台の子育ての現状をお話ししたい思います。

現在は市内全区に設置されている「のびすく」のうち、最初に整備された「のびすく仙台」は、乳幼児期の親子が安心して過ごせる居場所が少ないという市民の声に応えるため、市内のNPOや子育て支援関係者が長年の議論を重ねて開館しました。開館後、1館では圧倒的に足りないほどの利用者が殺到し、市民の声にも後押しされ、南北にも施設が整備されることになり、「のびすく泉中央」もその一つとして開館しました。のびすく泉中央ができる際、市の担当者からは子育て支援拠点として様々な機能を求められ、わくわくすると同時に運営のコンセプトに非常に悩みました。市と協議を続け、3つのコンセプトを掲げました。

1つ目は、すべての子育て家庭の支援です。平日だけでなく週末も開館することで、父親も来館しやすい施設としています。また、妊産婦から乳幼児だけでなく、中高生や子育て支援者も利用できる部屋を設けることで、幅広い層の支援を目指しています。

2つ目は、ルールが少ない居場所です。従来の施設の多くには時間制限や飲食制限などの多くのルールが存在しましたが、のびすくは月曜の休館日以外はいつでも来館・退館が可能で、利用者の自由な選択を尊重する居場所となっています。

3つ目は、「何かしたい」を実行できる施設です。特に中高生が「何かしたい」と感じたときに、それが実現できる場所であることを目指しています。

仙台市内には児童館が多数整備されており、主に小学生の居場所として機能しているため、のびすく泉中央では乳幼児と中高生に特化した安全な空間を提供することを重視しており、施設ごとの役割分担があります。

のびすく泉中央には、様々な機能がありますが、特に”理由を問わない”一時預かりについては、 子育て中の親にとって非常に画期的な支援です。有料ではありますが、ちょっとした用事でも、当日でも、預けることが可能となっています。

今の私たちが感じている仙台市内の保護者の現状から、さらなる父親支援の必要性を感じています。両親で子育てをすることが一般的になりつつある現代では、土日はもちろん平日でもものびすくに来館するお父さんが多くみられます。のびすくでは「プレパパ・ママ教室」を毎月実施し、夫婦での子育てをイメージいただいたり、先輩パパの様子をお伝えしたりしています。

○登壇者によるトークセッション

大宮　3名の方のお話、大変興味深く聞かせていただきました。寺田さんにお伺いします。公園と連携した屋内遊び場の整備にあたり、具体的にどのような点を意識すればよいでしょうか。

寺田　2つあると思います。1つ目は、縦割り行政にならず、公園部門、河川部門など前もって連携しておくことです。2つ目は、運営団体の方が「どんな外遊びができるのか」という意見を集め、プログラムを作り出していくプロセスを作ることです。この2つ、ぜひ実施いただければと思います。

大宮　ありがとうございます。大変参考になります。村山さんにお伺いします。自由さを大事にしたタントクルセンター運営にあたって、その実態を教えていただきたいです。

村山　自由という言葉に対し、恐怖を感じるのは大人です。ルールの整備により大人の安心感は得られても、私たちが実現したいのはこどもの豊かな育ちです。例えば高いところにのぼるのが得意な子、苦手な子といったひとりひとりのこどもの育ちを保証できる大人が増えていくこと、こどもの味方であるという覚悟を持つことが重要です。

大宮　市役所として、安全面はしっかりと意識しつつ、こどもの自由で自発的な遊びを大事にしていきたいと思います。小川さんにお伺いします。父親も行きやすい、居心地がよい空間とするために工夫されていることはありますか。

小川　私たちが考えていることは、母親だけの利用という括りを外すことです。のびすく泉中央の施工の途中でお邪魔した際、男性用がなく、設置するようにお願いしました。さらには、障害の有無、妊婦さん、年齢などにかかわらず、どんな方でも過ごしやすい設備というのが、利用者へのメッセージとして重要だと思います。

途中の休憩タイムでは、 参加者の方からのコメントをボー ドに貼っていただきました。 最終的には８６もの付箋のコメントが集まりました。

○会場からの質問等

司会　会場からの付箋には、「屋内外の融合、大賛成です」とありました。今回の西公園の遊び場でも屋根付きの半屋外ゾーンを検討していますが、寺田さん、このあたりはいかがでしょうか。

寺田　雨でも遊べて良いと思いますが、どんな屋根かによるという点もあります。こどもの体にとってはある程度の日光を浴びることも重要ですので、日光を浴びられる環境が良い思います。

司会　「けやきホールのスタッフは何人体制ですか」という質問もありました。村山さんいかがでしょうか。

村山　私たちクリエイトひがしねでは、けやきホールとあそびあランドの二つを運営しています。両方を行き来する職員がいることで、双方の連続性を体現しています。けやきホールは10人、ひがしねあそびあランドは12人の職員体制ですが、これ以外に多くのボランティアの方にも協力いただいています。

司会　のびすくで、過度な制限を設けず様々な方が利用している点についてもう少し教えてください。

小川　周辺地域だけでなく遠方からも多く来館いただいています。常にひろばにはスタッフがおりますが、様々な研修を受けたり、有資格者を配置するなどして、自分たちのひろばにあった運営をしています。

会場の後方には西公園プレーパークの会の協力によりキッ ズプレイコーナーを設けたことで、 お子さん連れでも参加しやすく、こどもの声も混じり合うシンポジウムとなりました。 こどもたちには、シール張りのアンケートもしてもらいました。

また、 西公園プレーパークの会のプレーリーダーから 「近隣のこどもが一人でも来やすい場所になると良い。 屋内で遊んでいて、屋外へも行ってみたいと思える場所になって欲しい。そして来た人はお客さんとしてではなく、みんなで一緒に遊びを作って、子育てをしていくような人材育成視点も大切だと思う。」 というお話をいただきました。また、河岸段丘の高低差を駐車場で解消するようなアイデアもいただきました。

○付箋やアンケートで頂いた意見（100件）より抜粋

・「内と外のつながる遊び場」 にワクワクしました！ぜひ！
・大人の安心をこどもに押し付けないことの大切さを非常に感じた。 ありがとうございます！
・実際に車イスのこどもを連れて公園に行き遊ぶことが難しかった経験から ・ ・ ・ 真のインクルーシブとは？
・こどもがぼーっとできる場所 （部屋？） を。
・安心安全な居場所として見守る人（スタッフ）が大事と思いますが、 ソフト面、人材育成、 ボランティアも含め充実させてほしい。
・その時々のこどもたちの考えで、 遊びがさまざまに変えられる施設になると良いと思いました。
・親も過ごしやすい施設だと行きやすいです。
・けやきホールの喜怒哀楽を肯定し、 ありのままの自分を受け入れられる安心感を育むというコンセプトが、大人の自分も心に響いた。
・多様な遊びを考えるうえで、休み方も提案してほしい！自分がこどもの頃、 遊び場に連れて行かれて遊びを指定されたり、 遊ばなければいけないという強制感がつらかった。自然を見たり、 太陽光を浴びて休んだり、、、 すき間をつくっていただけると嬉しい。
・中高校生も大学生も遊び、 学べ、 関われる、 運営できる、 楽しめる、 居場所がある施設になって欲しい。
・東根市の遊び場のお話を聞いて、 遊び場スタッフの人材育成も大切だと思いました。
・プレーパークの考え方に沿った遊び場を望みます。自由な遊び場。 子どもの 「やってみたい」 を大切にする。 なるべくルールや禁止事項を設けない。 子どもだけで行ける。 屋外とのつながりを大切にする。スタッフはプレーリーダーの研修を受ける。
・ 子どもへの意見の聴き方や、 インクルーシブ公園の現状などの話、 山形や仙台での現在の取り組みなどのお話もとても良かったです。 ふせんのワークでは参加者の方々からもそうそう！と思うとても良い意見が多数出ていて、 良かったと思いました。 あとはこれをきちんとまとめて形にしていただけることを期待します。

今回のシンポジウムでは、専門家の方々から、屋外との連続性、インクルーシブな環境整備といった施設のハード面だけでなく、運営面や「遊育」や「共育」といった理念など、ソフト面の重要性、そしてこどもたちの主体的な参画の必要性等に関するお話をいただきました。
なお、シンポジウムについては年度内にもう一度開催する予定としております。